

文化の固有性に気づく

2月に、インドのハイデラバードを訪れた。インドは人口の78%がヒンズー教と言われるが、実際にはイスラム人口も多い。早朝から拡声器が鳴り響き、肉料理はチキンかマトンのいずれかであると言え、なるほど、ヒンズー教のみならず、イスラムが日常生活にまで強い影響を及ぼしている国であることがわかる。キリスト教はわずか2%、少数派である。

いくつかのキリスト教会を訪問する機会を通してキリスト教会にも、インド独特のカーストの影響が根深くあることに興味深く思った。インドには大きく四つのカーストがあるが、カーストにすら入らない、ダリットと呼ばれる階層がある。問題は、キリスト教会すらそのカーストの違いを乗り越えることができずにいることだ。それぞれのカーストに所属する人たちごとに、教会が形成されている。上位のカースト出身の牧師と信徒からなる教会と、下位のカースト出身の牧師と信徒からなる教会に分かれてしまう現実がある。

キリスト教ほど、平等博愛の精神を説いている宗教はないというのに、カーストの違いが乗り越えられていない。聖書信仰と矛盾するカースト制度を温存しながら、キリスト教信仰が成り立ち、教会活動が進められていく。インド人の差別的文化を乗り越えられないこのインドのキリスト教というのは、一体何なのだろう、と考えるところがあった。

しかし、そもそも、インド人の考え方の中に、シンクレティズム(混交主義)的要素があつて、インド人の多数が信じているヒンズー教も、様々な宗教の組み合わせによって成り立っていることを考えれば理解されるような気もする。つまり、キリスト教もインド的に変質している部分があるのではないか。けれども、こうしたすべてを伝統の中に取り込んでいくインド人の思考性、精神性は、日本においても見られるものである。実際、日本人の仏教も、インド仏教とははるかに異なっているし、キリスト教も、本来の聖書信仰とは、必ずしも、同一とは言えない、文化性を反映している部分がある。

宗教においてそうであるとすれば、まして、貧困などの社会変革に対する取り組みについても、まずは、この文化固有の思考性、精神性を避けて通ることは出来ないことだろうと思う。ただ、お金を出せばよいだけではない、ただ井戸を掘ればよい、ただ識字教育を進めればよい、というわけではない、文化に深く根ざす問題に向かわなければならぬ課題があるように思う。貧しい国をただ豊かにするというのではなく、その根底にある精神性に触れて、真に自立した豊かさ、成熟した豊かさに向かわせていく働きが求められているのではあるまいか。

(HFI代表 福井 誠)

CONTENTS

- 巻頭言 「文化の固有性に気づく」 (福井誠) …P.1
- 現地活動報告 フィリピン・ベトナム (田原寿子) …P.2~5
- スポンサーの広場 (小西池 真実さん) …P.5
- 日本事務局から 活動報告 (事務局) …P.5
- フィリピン・レシピ 《ピナク・ビット》 …P.6
- お知らせ …P.6